

大学教員職の分業化が研究成果に与える影響*

平山萌香

指導教員 矢内勇生

研究背景

大学教員には研究競争の激化等を背景として高い研究成果が求められる一方、教育の質保証や学生指導に対する要求は増大している。教員ごとに研究と教育への志向や適性には個人差があるにもかかわらず、多くの大学では両者を同一の教員に包括的に求める職務モデルが維持され、教員の業務負担が増大している。そこで研究及び教育の時間・資源の配分を決定し、その配分に基づいて業務を行う大学教員職の分業化が、欧米諸国やオーストラリアを中心に導入されている。日本の大学教員は国際的に研究志向が強く、研究成果への評価比重が高いため、教育と研究を両立困難と感じる者が多い。

研究目的

大学教員職の分業化が研究志向の強い教員の研究成果に与える影響を明らかにすることで、日本の大学教員制度において、研究志向の強い教員がより研究に専念できる制度的環境整備に向けた改善の余地を示す。

研究方法

大学教員職の分業化を制度的に導入しているオーストラリアの大学を対象とし、個人レベルのパネルデータを用いて分析を行う。研究志向を直接観測するのは困難であるため、論文発表数および被引用数に基づき研究成果の高い教員を分析対象とする。推定には大学ごとに異なる分業化導入時期を活用し、staggered difference in differences (DiD) を適用する。

分析結果

観測不可能な個人特性や分野別において年ごとに共通して受ける影響を考慮して分析を行った結果、有意水準5%で統計的に有意な差はみられなかった。つまり、本研究の分析では分業化が研究成果の高い教員に与える影響を確認できなかった。

考察・結論

大学教員職の分業化が研究志向の強い教員の研究成果に与える影響を確認できなかった。本研究では分析期間や媒介要因、研究者のキャリア形成や所属移動の質的側面といった検討課題があるため、それらを考慮した検証が必要である。

* 本研究は指導教員である矢内勇生先生ならびに研究室の皆様のご指導のもと、完成に至りました。なかでも、矢内勇生先生には本稿の執筆に際し、多大なるご指導を賜りました。ここに深く感謝申し上げます。